＼原則／ 早めの避難

浸水前の早い段階に安全な場所へ

水の中を避難するのはとても危険です。浸水前の避難にどの情報が活用できるか確認し、避難のきっかけをつかみましょう。

どこへ？

例えば・・・
◎洪水に対応した予定避難所
◎親戚、友人宅など、市内に限らずより安全な場所
◎川の付近や浸水が予想される箇所から離れた場所

＼逃げ遅れたら／ その場そのときで命を守る行動を

浸水した後には、より高い場所へ

どこへ？

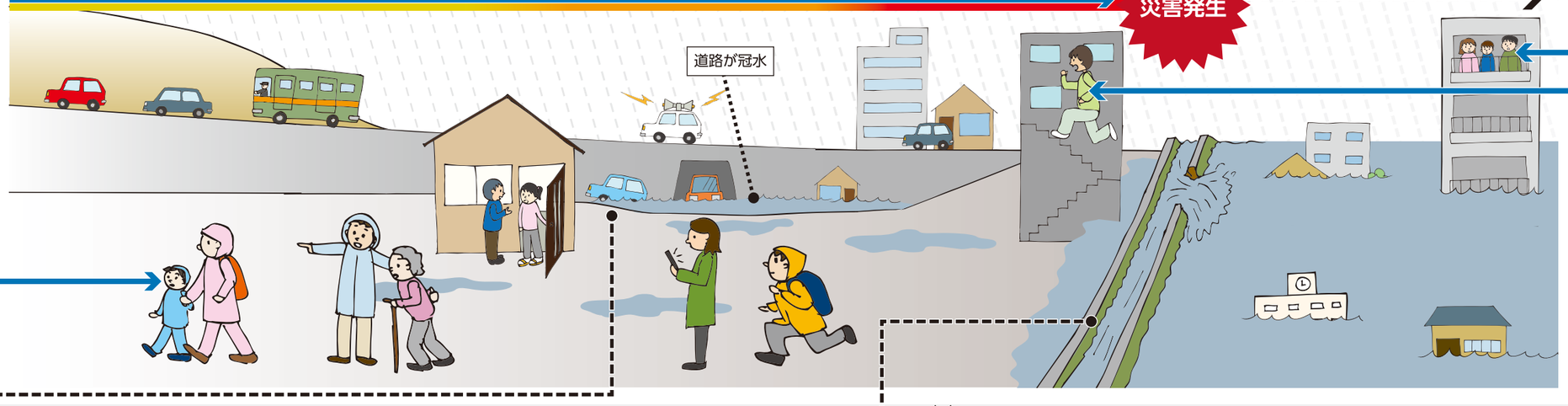
例えば・・・
◎高い建物や高い場所
◎自宅の高いところ
◎予定避難所に限らず、近くの安全なところ

避難準備情報　特に避難行動に時間を要する方は 避難開始

避難勧告　すべての住民の 方は 避難 開始

避難指示　すべての住民の方は 直ちに避難

人的被害の発生する可能性が高まった状況 → 人的被害の発生する可能性が明らかに高まった状況 → 人的被害の発生する可能性が非常に高いと判断された状況 → **災害発生** → 災害発生後



注意

洪水時には普段では気づかない危険が潜んでいます。
急激な雨で道路や低い土地が浸水することがあります。

洪水時の危険箇所を P.12 で確認しましょう

注意

増水した水路や川に近づいたり、横断しての避難は危険です。
雨が強くなる前や水位が高くなる前に、早めの避難を始めましょう。

地域の特徴や避難先を、ハザードマップ（P.31 ～ P.38）で事前に確認しましょう

！気象情報に注意

大雨により浸水災害が発生するおそれがある場合、警報や注意報などの防災気象情報が気象庁から発表されます。

雨が強くなると ↓ 大雨が降り続くと ↓ **非常事態** さらに激しい大雨が続くと

大雨注意報・洪水注意報
災害が発生するおそれがあるときに発表されます。

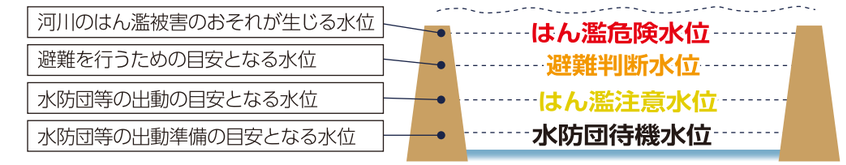
大雨警報（浸水害）・洪水警報
重大な災害が起こるおそれのあるときに発表されます。

大雨特別警報（浸水害）
重大な災害が起こる可能性が非常に高まっているときに発表されます。

気象情報の入手方法は P.41 ～ P.42 で確認しましょう

！水位情報に注意

大雨や洪水による河川のはん濫の目安として基準水位が設定されています。
河川の水位情報は、ホームページ等で確認できます。



河川名	紫川	紫川	紫川	神嶽川	砂津川	板櫃川
水位観測所	木町観測所	貴船橋観測所	宝来橋観測所	平和橋観測所	砂津橋観測所	日明観測所

水位情報はホームページ防災情報北九州（P.42）で確認しましょう

洪水災害の種類

河川はん濫（外水はん濫）

川があふれたり、堤防が決壊しはん濫

外水はん濫は、家屋でさえ破壊するほどのエネルギーで一気に押し寄せてくるため、一般に流れが速くなります。とりわけ河川に近い場所では注意が必要です。

内水はん濫

川があふれなくても、排水できずに浸水

内水はん濫による浸水は、くぼ地において雨水が排水できずにおこります。局所的な低地や急勾配な場所などでは流れが速くなるおそれがあり、浸水深が浅くても危険な場合があります。

浸水想定区域って？

浸水想定区域とは、水防法に基づき、特定の河川がはん濫した場合に、浸水が想定される区域及び水深を、国または県が公表したものです。市は、公表された河川以外でも、大きな浸水被害が予想される河川については、浸水想定区域を明らかにして、ハザードマップに掲載しています。

浸水想定区域は一つのシナリオに過ぎない

浸水想定は、数十年、百数十年に１回程度の雨を想定して計算されています。このため、想定以上の降雨があった場合には、より広い範囲で浸水害が発生する可能性があります。また、想定を行っていない河川もはん濫する可能性があるので、注意が必要です。

各地域の浸水想定区域はハザードマップ（P.31 ～ P.38）で確認しましょう

これまでに多くの洪水災害が発生しています

昭和 28 年の北九州大水害

昭和 28 年６月、旧小倉市では４日間連続の雨量が 696.5 ミリと、驚異的な豪雨となりました。特に 28 日午前９時から正午までの雨量は 200 ミリを超え、市内の各河川のはん濫や各地での堤防決壊により、旧小倉市内では、家屋の８割近くが浸水するという大きな被害となりました。

昭和 28 年６月小倉北区（朝日新聞社撮影）

平成 22 年７月八幡西区

普段では気がつかない危険が潜んでいます

注意 水の中を避難するのはとても危険です

高架下のアンダーパスや地下道など、周囲より低く冠水しやすい道路の通行は避けましょう。

万が一、車が動かなくなったら、脱出することを第一に考えてください。

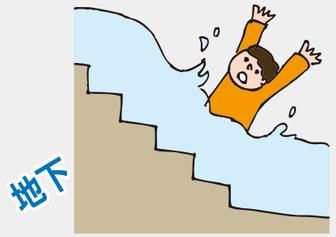
水が濁って、足元が見えにくくなります。もしフタが外れていると、マンホールや排水溝などに転落して危険です。

日頃から周囲の危険箇所を確認し、あわせて排水溝の清掃等も行いましょう。

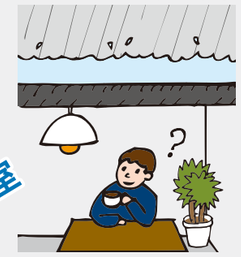
水の深さが浅くても流れが速い場合は歩くのは危険です。

注意 自宅や建物の中にも危険な場所があります

地下には水が一気に流れ込んできます。



地下室では、浸水の危険性に気づきにくいことがあります。



数十センチの浸水でも水圧でドアが開かなくなります。

自宅にとどまる際の注意点

自宅にとどまるのが危険な場合も

次のような建物では、自宅にとどまるのは危険です。

浸水が２階まで達する家屋
河川沿いにある木造家屋

自宅の中の少しでも安全な場所に

同じ建物の中でも上層階など、浸水から安全に身を守れる場所へ避難しましょう。

自宅にとどまる場合には準備と覚悟を

浸水した場合には、水道、電気、ガス、トイレ、エレベーターなどが使えなくなる可能性があります。自宅にとどまる場合には、十分な食料、飲料水、医薬品などの準備と、不便を強いられることへの覚悟が必要です。

P.45 ～ P.46 の「非常持ち出し品・備蓄品リスト」をみて準備しましょう